

長岡京跡右京第 1019 次調査出土 須恵器大甕

遺跡名 長岡京跡右京八条二坊二・六・七町

所在地 長岡京市調子一丁目 25-1 他

調査期間 2011 年 2 月 14 日～2012 年 3 月 31 日

調査面積 6300 m²

出土遺構

立命館中学・高校の建設に伴い、約一年間にわたって調査を行いました。調査の結果、江戸時代・戦国期・平安時代・長岡京期の各時期で貴重な成果が得られました。長岡京期では、掘立柱建物、井戸、溝などが見つっています。このうち 2 トレンチでは甕据え付け穴を持つ建物と周囲の溝から須恵器の大甕が出土しました。

掘立柱建物 SB88 南北 2 間 (4.8m)、東西 5 間 (10.5m) の東西棟建物で、南に 1 間 (2.7m) の廂を持っています。建物の内部には須恵器の大きな甕を据え付けた丸い穴が南北 3 列、東西 8 列、総数 23 個残っていました。穴の直径は 0.8～1.2m、深さは 0.3～0.4m で、南側中央付近には甕の据え付け穴はなく、出入りや作業のための空間となっていたようです。このような建物は文献や木簡などから、酒などの醸造を行っていた施設と見られます。当地は長岡京の右京八条二坊七町にあたり、都の中ではかなり南に位置しています。2 トレンチの西側で 1986 年に行った調査でも 51 個の甕据え付け穴を持った長大な建物が見つかることから、この場所は醸造施設が集中して建てられていたようです。

溝 SD84 SB88 の西側にある南北溝です。幅約 2 m、深さ 0.2m で、中からは長岡京期の食器類などのほかに須恵器の大甕ほぼ一個分が壊れた状態で出土しました。おそらく SB88 に据えられていた甕の一つだと思われます。

溝 SD85 SB88 の北西にある小さな溝で、土器片と焼けた土や炭が見つっています。おそらくゴミなどを焼却した跡と見られます。

溝 SD90 SB88 の東側にある南北溝で、幅約 3 m、深さは 0.3m あります。長岡京期の遺物が少量出土していて、須恵器大甕の破片も確認できます。これらの溝群は掘立柱建物 SB88 を取り囲むように作られていることから、建物に関連する機能を持っていたと見られます。

溝 SD84 出土須恵器大甕

発掘調査が終了した後に土器の洗浄、復元作業を行った結果、9 割近く破片が残っていて、ほぼ完全な形に復元することができました。都城の調査では、大甕の破片はときどき見つかりますが、このように底部から口縁部までがそろそろものはほとんどなく、全体の形が判明するきわめて貴重なものといえます。長岡京ではもちろん初めてのものです。

高さ—112 cm、口径—58 cm、胴の直径—114 cm

重さ—約 90 kg、破片数—約 300 片

容量—約 670 ㍓、三石七斗二升（古代の容量では八石七升四合）

須恵器の大甕は古墳時代から作られていますが、類例は非常に限られています。大きさは高さ 100～110 cm、胴の直径 90～100 cm 前後のものが多く、今回復元できた甕はおそらく日本でも最大クラスと思われます。この大甕は、大阪府南部の泉北丘陵に存在した須恵器の一大生産地である「陶邑」で作られたものであることが判明しています。

甕の口縁部は低く、厚みがあり、端部が下に垂れ下がるようにつくられています。これが奈良時代以降に作られた陶邑産の大甕の特徴です。口縁部は窯で焼かれたときに熱で変形していて、口縁部と肩の境には亀裂が生じています。貯蔵など実際に使用するには問題はありませんが、最終的にこのことが原因で破損し、この場に放棄されたと推定されます。体部には自然釉がかかっており、底部には窯の内部で倒れないように固定するための台の跡が 7 カ所残っています。

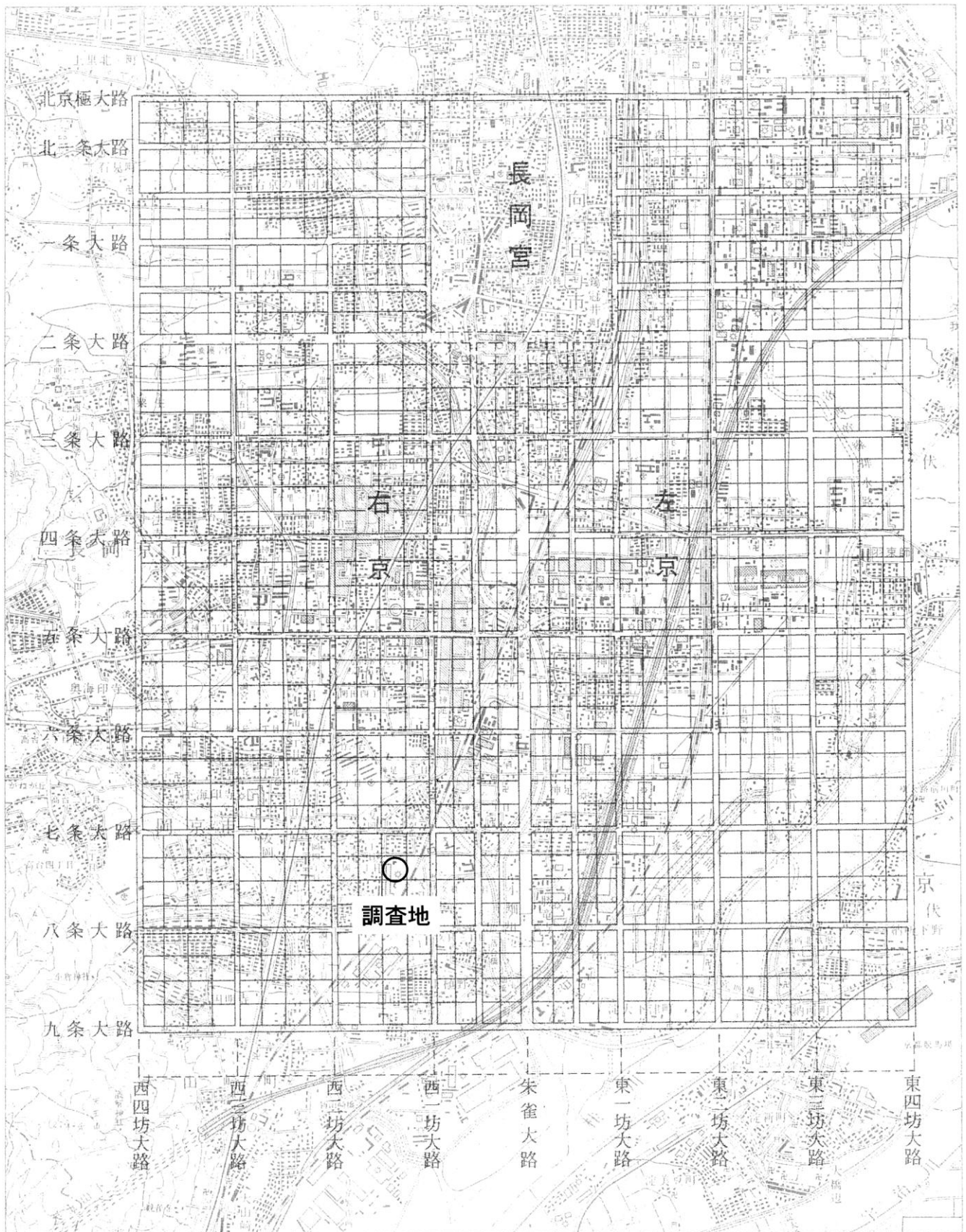
須恵器大甕の需要と供給

陶邑では奈良時代の半ば以降に、このような大甕を大量に焼くための特別な窯が作られ始めます。これらは広大な陶邑のなかでも限られた地点に集中していて、専門の集団が製作していたようです。一方消費地である平城京では、奈良時代の中期から後期にかけて京内に甕据え付け穴を持つ建物が増加することがわかっています。このことから都を中心とした大甕の需要の増加に対応して、陶邑での変化が起こったものと考えられます。このような大量に大甕を使用した施設は酢、醬、酒などの醸造に関係していた可能性が強く、特に文献などから見て、酒造りに関連するものが多かったと考えられます。このような変化の背景には大量生産が可能になるような醸造技術の変化や、需要が増加するような時代的な変化があったとも考えられますが、今のところはっきりとはわかりません。

甕据え付け穴を持つ建物は後の都である長岡京・平安京でも引き続いて見られますが、平城京ほど類例は多くありません。長岡京では規模の小さなものは全域に見られますが、大規模なものは今のところ今回大甕が出土した右京八条二坊七町に集中していて、少なくとも 2 棟の建物に、74 個もの大甕が存在していました。どうやら都の南部に醸造施設が集中していたとも考えられます。平安京では前期の頃に西市の北側に分布が認められますが、その後確認できなくなっていくます。甕据え付け穴を持つ建物が消えていった理由の一つには、大甕の生産地であった陶邑が衰退し、やがて生産を止めてしまうこと、醸造用の容器が桶などの別のものに変化したことなどが考えられます。ただし後の時代には備前や常滑の甕を使った大規模な酒造りが行われており完全に無くなった訳ではないようです。

今回の須恵器の大甕は、都城から出土した大甕としては完全な形に復元できる非常に珍しい資料であり、かつ日本でも最大級の大きさを有するものとしても意義のあるものです。さらに産地が限定できる点、甕据え付け穴建物に伴い、醸造などに使用されたと考えられる点などこれら遺構・遺物を研究する上でも大変価値のあるものだといえます。またこれまで生産地（奈良時代中期以降の大甕専用窯の増加・口縁部の変化）と消費地（甕据え付け穴建物が平城京内で増加）で別個に指摘されていた問題点が、互いに関連し合う内容らしいことが判明したのも新たな成果といえます。

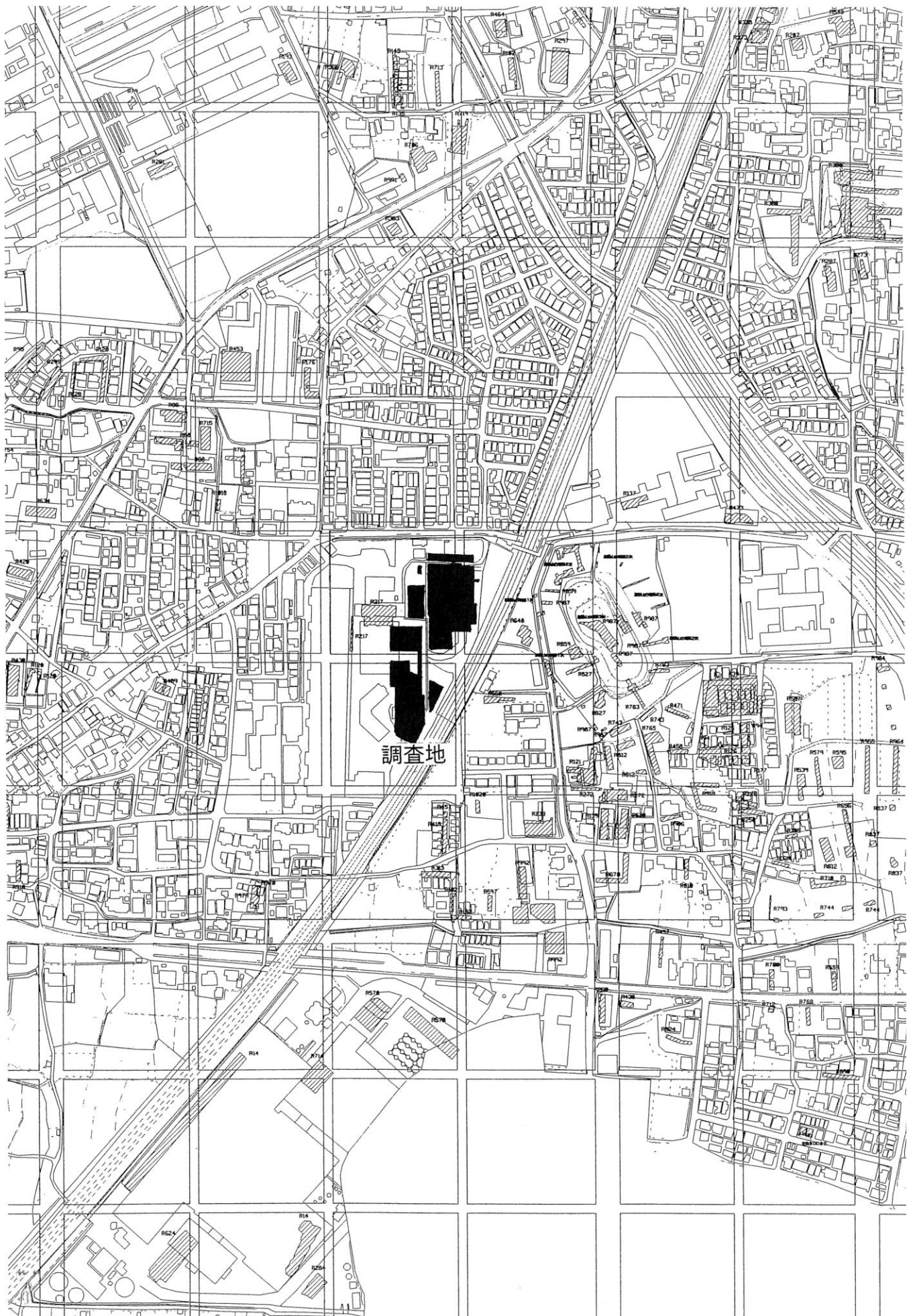
長岡京条坊復原図



この図は、奈良県立歴史博物館蔵の「長岡京の復元図」に基づいて作成された。図中の数字は、各街区の面積を示している。単位は、坪（タタリ）である。

1 : 30,000





Y=-27,580 Y=-27,570 Y=-27,560 Y=-27,550 Y=-27,540 Y=-27,530 Y=-27,520 Y=-27,510 Y=-27,500 Y=-27,490 Y=-27,480

X=-120,660

X=-120,670

X=-120,680

X=-120,690

X=-120,700

X=-120,710

X=-120,720

X=-120,730

X=-120,740

X=-120,750

X=-120,760

X=-120,770

X=-120,780

X=-120,790

X=-120,800

X=-120,810

X=-120,820

X=-120,830

X=-120,840

X=-120,850

6トレンチ

試験2トレンチ

3トレンチ

1トレンチ

2トレンチ

右京第217次調査

5トレンチ

八条条間小路

試験1トレンチ

2トレンチ

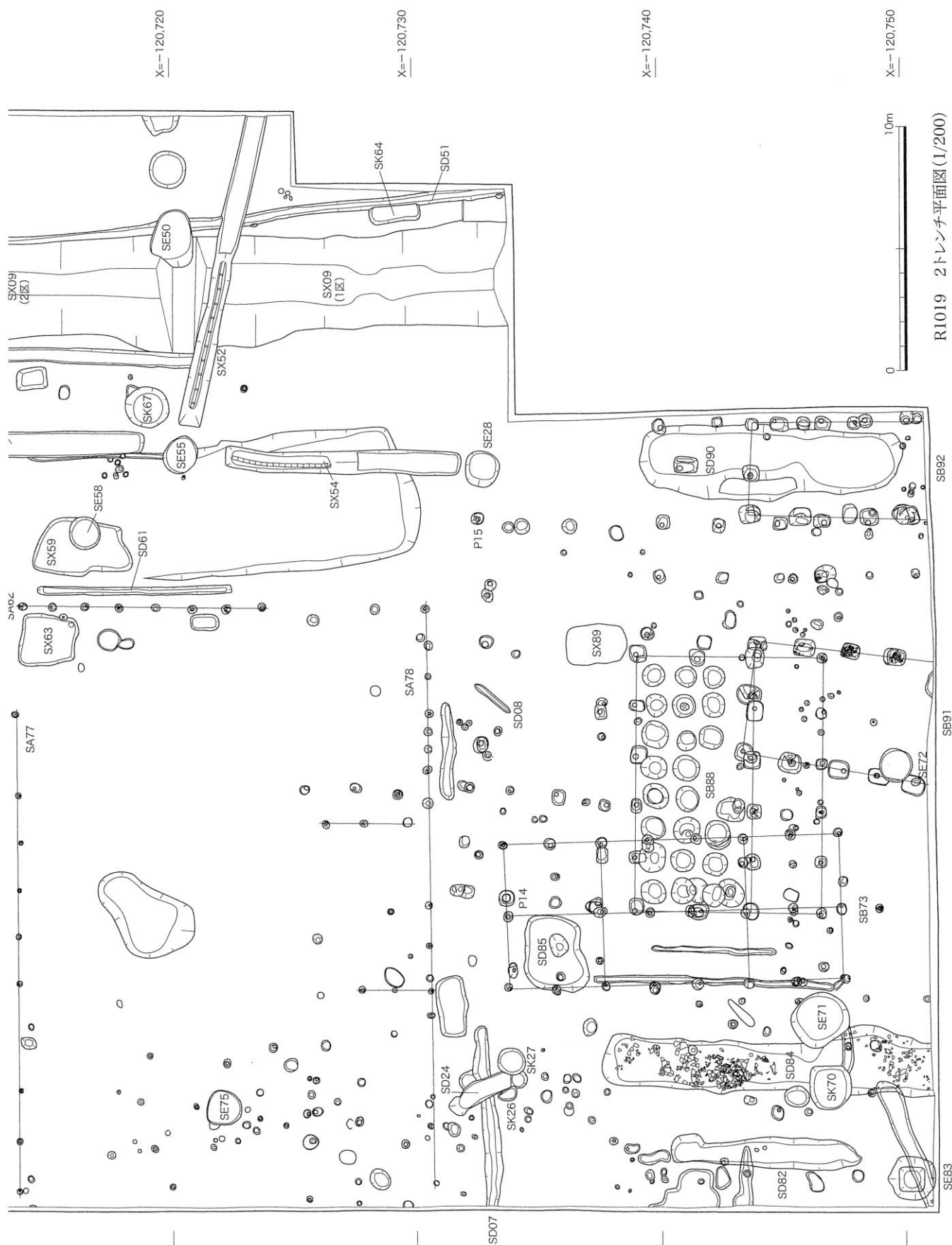
1トレンチ

4トレンチ

西二坊坊間東小路

0 20m

長岡京跡右京第1019次調査 遺構平面図





長岡京跡右京第 1019 次調査 2 トレンチ全景（北から）



甕据え付け穴を持つ建物と須恵器大甕の出土状況（西から）

長岡京跡右京第 1019 次調査出土 須恵器大甕の復元



▲破片の組み上げ。



▲実測作業。



▲石膏入れ。



▲色塗り。



長岡京跡右京第 1019 次調査出土須恵器大甕